

高姫西 SSH 通信

vol.8 2026.3

第11回 高校生国際シンポジウム

書類選考を通過した2年国際理学科の社会学研究グループが、第11回高校生国際シンポジウムに参加しました。18日午前中は、基調講演「脳の性差と多様性」、パネルディスカッション「社会の変化と求められる力」を聴講しました。午後からの課題研究発表・審査会では、社会科学・社会課題分野において「交差点における交通事故発生の環境的要因～交通事故を減らすために～」というテーマで発表を行いました。その後、他校の生徒との生徒交流会に参加しました。

19日は表彰式・講評に参加し、進路座談会「20代、その先のリアル」を聴講し、審査員との交流会に参加しました。最後に優秀発表・グランプリ発表がありました。



感想

「偶然を必然に」この2日間の中で最も心に残り、また生涯忘れることのないであろう言葉である。サイコロを振った時、1の目が出る確率は6分の1だ。しかしながら、何十回も振った時、一度も1の目が出ない確率は非常に低い。自分の求める結果、または自分の人生を丸ごと根底からひっくり返してしまうような素晴らしい出会いなどというのはそうそう起きるものではないし、1の目が出る確率よりも低いかもしれない。だが、振り続けていればそのうち必ず出会うことができる。私はこの鹿児島で過ごした2日間の中で何度もサイコロを振り、1の目あるいはもっと貴重なものに巡り会えた。課題研究を含む学校での活動が、日々何か打ち込む皆さんにとってサイコロを振るきっかけとなることを願う。

2-7 武津 遼大

国際シンポジウムを通して、研究とは単なる課題解決ではなく、「自分が本当にやりたいこと」を突き詰めるものなのだと強く感じた。社会課題は常に変化し、何が重要かは時代によって異なる。だからこそ、評価や即効性に縛られず、知的好奇心や Passion を原動力に探究する姿勢が大切なのだと思う。また、AI時代において、情報処理はAIに任せつつ、Dialogを重ねる力や Leadershipこそが人間の価値になるという指摘が印象的だった。自分の興味を信じ、恐れずに Risk-take していきたい。

2-7 白水 悠斗

自分が本当にやりたいこととは何なのかを考えさせられる2日間だった。私立高校や中高一貫校で学ぶ人、国際プログラムで学んでいる高校生、海外大の博士号を持っている大人たち。地元で生活して

いるだけでは出会えないような濃いバックグラウンドの方たちからの刺激を浴びるように貰えた。これからの人生で私自身の世界がどんな風に広がっていくのか、とても楽しみになった。そして、この場に集まった人たちは皆、高い水準の志を持っていて、本当にやりたいことをとことん追求していた。その姿が、自分の人生を見つめ直すきっかけとなったので、このような機会をいただけて本当に良かった。

2-7 竹田 伊織

この二日間を通じて、多くの方々と出会い、貴重な学びを得ることができた。多様な経歴を持つ先生方の講演から、社会課題の発見や解決に向けた視点、そして自身の進路を考える上での知見を得た。また、全国から集まった高校生による発表や交流を通じて、同世代の論理的思考力、行動力、そして探究に対する強い情熱に大きな刺激を受けた。これらの経験により、自身の将来像に対する視野が広がったと実感している。高校生国際シンポジウムは、通常の学校生活では得難い情報や人とのつながりを得る貴重な機会であった。これまで支えてくださったすべての関係者の皆様に深く感謝するとともに、今後は社会に貢献できる人間になりたいと強く思うようになった。

2-7 林 真優

国際シンポジウムでは、自分のやりたいことをとことん突き詰めている猛者たちが全国から集っていた。発表を聞き、交流会で議論を交わすことで大きな刺激になった。私たちのテーマは交通事故防止であり、やや堅い内容だったので、自らの純粋な好奇心に従って熱く語る彼らを見て少し羨ましくもなった。評価や研究のしやすさ、社会への貢献ももちろん重要だが、自分の好きなものを追究することこそが、研究に本当の熱を生み出すのだと実感した。また、第一線で活躍されている方々のお話を直接伺うことができ、特に「日本経済の停滞の30年は、日本人が自発的にやりたいことへ挑戦してこなかったことが一因である」という言葉が印象に残っている。お話を伺った方々に共通しているのは、現状に満足せず貪欲に挑戦し続けてきた姿勢であり、私もその姿勢を見習い、自身の可能性に挑み続けたいと感じた。賞こそ取ることはできなかったが、緊張しながらも大きな舞台上で堂々と発表できてよかった。私たちの班は多くの時間を地道なデータ収集に費やし、苦しい時期もあったが、班員と励まし合いながら乗り越えることができた。ここまで来られたのは苦楽を共にした班員、チームを常に引っ張り続けたくれた班長のおかげである。心から感謝したい。

2-7 伊藤 惇志

